

地域の活性化を図るために ICTをどう活用するか

東北支部長 玉本英夫



私は37年前の1976年に地方の大学に赴任した。コンピュータは学科にTSSのミニコンが1台あって、それをTTYで使って仕事をした。間もなく、ワンボードマイコンが現れ、それを入手して改造し、ミニコンのインテリジェント端末にした。この端末経由で計測データをミニコンに送ってデータ処理し、処理結果をX-Yレコーダに出力した。数年してパソコンが出てくるとコンピュータの専門家でない人も気軽にコンピュータを使えるようになり、パソコンの普及活動のために、4、5年、夏休みに市民の方に「パソコン教室」を開いた。好評で大勢の方に参加して頂いた。地元TV局のパソコン番組の講師もした。一方、県内の中小企業に出かけていって、マイコンやパソコン活用の技術指導を行った。コンピュータがものすごく身近なものに感じられるようになった時代であった。

それから15、6年たった1992年に大学でインターネットが使えるようになった。研究会を作り、県内の学術研究機関に啓発活動を始めることにした。インターネットに関心を持った企業の方や一般の方が人づてに研究会のことを聞きつけて参加され、最終的にメンバーは300名近くになった。インターネット関連の公開講座や講演会を開くと大勢の方が参加され、情報通信技術がものすごく身近なものに感じられるようになった時代であった。

さて、この二つの活動を紹介したのは、昔のことを懐かしく思い出したからではない。今日我が国における大きな課題の一つは、地方の再生であろう。そのためには、産業の活性化すなわち魅力ある産業を興してたくさんの雇用の場を作ること、豊かな文化を育てることや復興すること、安心して豊かに過ごせる環境を作ることなどが求められる。地方の再生にどのように関わっていけばいいのかを考えると、今、紹介した活動が何かヒントになるような気がしたからである。

パソコン教室での熱気、マイコンやパソコンの技術指導を行ったときの技術者の熱気、インターネットの研究会での熱気、これは、コンピュータや通信技術がものすごく身近に感じられ、この技術を使って何かおもしろいことができそうだと思えたからに違いない。夢のある話を熱く語ったように記憶している。

複雑多様な社会の進むべき方向を決めるには、その時代に即した社会のあり方の指針となるべき理念が必要である。今、それは、「グローバル」と「イノベーション」である。経済活動や社会活動が国際化している現在、日本が世界に伍していくためには、技術を研ぎ澄まし先端技術で勝負しなくてはいけないことは確かである。しかし、先端技術を支えるには基盤となる技術が必要であるし、先端技術だけが必ずしも革新的なものを生み出すわけでもない。過去のものと思われていた技術が、新たな技術の出現や技術の進歩、社会からの要請などによって、再び注目されるケースはたくさんあるように思う。そのような技術は、最先端の技術とは違い、身近に感じることができる技術である。

現在、少子高齢化が大きな社会問題になっているが、地方においてはより深刻である。医療や介護のサービスを充実させること、高齢者が生きがいを持って過ごせる社会を作る必要がある。地方には長い歴史を持つ芸能などの貴重な無形文化財がたくさん残っていて住民の心のよりどころになっているが、存続の危機にあるものが多い。これらの文化財をどう伝えていくか。このような課題の解決にはICTの活用は有効であり、身近に感じられるようになっている技術を地方で活用できる一例である。

地方にあっては、身近に感じられる技術を熱く語り、その技術を活用して新たな産業を興していくことが、地方の再生の一つの有効な方法であると思う。このために、どのような仕組みを作ればよいか、地方にいてICTの仕事をしている者として、過去の経験をヒントに今一度真剣に考えてみたいと思う。